

プロジェクト研究所

プロジェクト研究所一覧

No	研究所名	所長名	所属学類
1	芸術による地域創造研究所	渡邊 晃一	人間発達文化学類
2	小規模自治体研究所	塩谷 弘康	行政政策学類
3	松川事件研究所	初澤 敏生	人間発達文化学類
4	地域スポーツ政策研究所	蓮沼 哲哉	人間発達文化学類
5	災害心理研究所	筒井 雄二	共生システム理工学類
6	資料研究所	黒沢 高秀	共生システム理工学類
7	磐梯朝日自然環境保全研究所	塘 忠顕	共生システム理工学類
8	福島県方言研究センター	半沢 康	人間発達文化学類
9	イメージング（見えない物を見る）研究所	平 修	食農学類

芸術による地域創造研究所 活動報告書

所長 渡邊 晃一

研究活動内容

I 福島大学芸術による地域創造研究所の概要

1. 研究テーマ・目的

- ・地域の活性化に関する実践的研究
- ・芸術による文化活動を通じた街づくり

今年度の主な研究メンバー

芸術による地域創造研究所は、学系の専門的領域を横断した学際的な研究を推進し、県内の文化施設の研究者によって構成される複合的な組織。

< 研究代表者（研究所長） >

人間発達文化学類 渡邊晃一

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

人間発達文化学類 内藤良行（監査）

人間発達文化学類 小島彰

人間発達文化学類 初澤敏生

人間発達文化学類 澁澤尚

行政政策学類 久我和巳

システム理工学類 永幡幸司

うつくしまふくしま未来支援センター

天野和彦

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

いわき市立美術館・館長 佐々木吉晴

福島県立博物館・副館長 川延安直

福島県立博物館・主任学芸員 小林めぐみ

福島県立美術館・主任学芸員 増淵鏡子

郡山市立美術館・主任学芸員 杉原聡

東京学芸大学・准教授 笠原広一

会津大学・教授 柴崎恭秀

宗像窯窯元 / 陶芸家 宗像利浩

NPO 法人コモンズ・理事長 中里知永

2. 研究概要

芸術による地域創造研究所は、学系の専門的領域を横断した学際的な研究を推進し、県内の文化施設の研究者によって構成される複合的な組織である。研究内容としては以下の7件があげられる。

(1) 芸術文化による街づくりの意義に関する研究

(2) 芸術文化を通じた地域の活性化の事例研究

- ・国内外の事例収集
- ・成功要因の分析，調査

(3) 県内モデル地域における文化政策研究

- ・地域文化資源の洗い出しとネットワーク化の研究
- ・地域産業と連携した研究支援
- ・デザイン（新たな商品開発，ブランディング）

(4) アートイベントの企画と運営による実践研究

- ・芸術祭の企画監修，アドバイス
- ・モデル地域における芸術企画の実践研究

今年度の実践研究

二本松市「重陽の芸術祭」

(5) 芸術文化による国際交流

- ・ビエンナーレ、シンポジウム

(6) 東日本大震災後の復興における支援活動

- ・「鯉アートのぼり」
- ・「緊急災害時のユニバーサルデザイン」

(7) 学生の学習効果の検証

- ・演習：「芸術企画演習」
- ・講義：「現代アートマネジメント(COC)」

II. 令和元年度の研究報告

1. 研究テーマと概要

モデル地域における芸術企画の展開

(1) 実践研究

福島県立博物館 企画展

「とりもどすきずな つながるみらい」

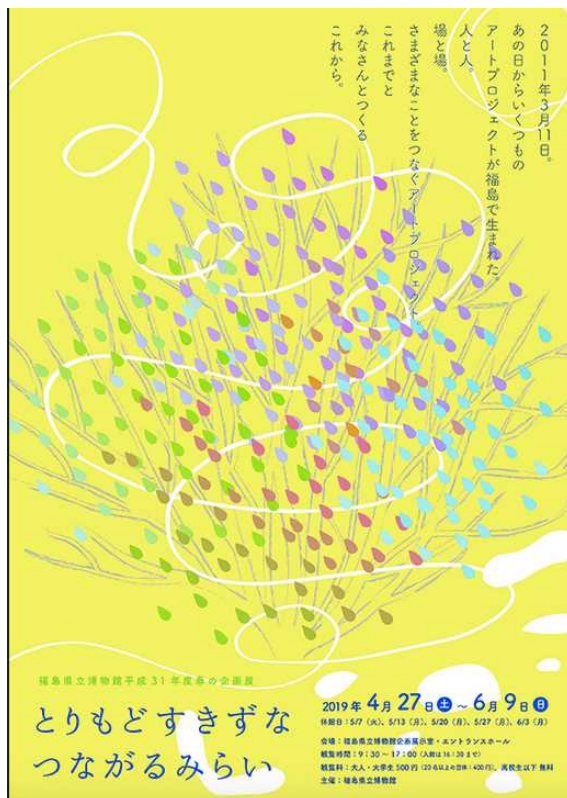
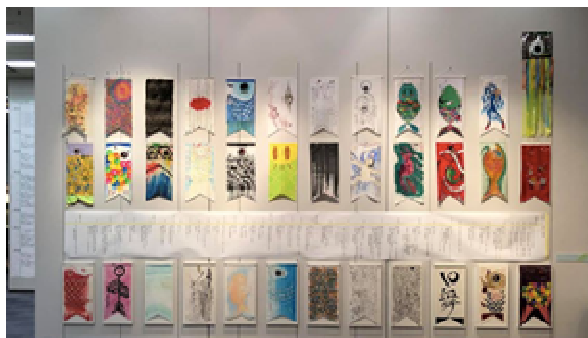
参加出展

4月27日～6月9日：福島県立博物館

・会津若松市

2011年3月11日の東日本大震災により多大な被害を受けた東北の被災地では、被災直後から文化芸術による支援活動が行われた。福島県でも避難所でのコンサート、仮設住宅でのワークショップ、伝統芸能の支援、地域産業とのコラボレーションなど、さまざまなスタイルの支援があり、被災者・被災地と支援者・全国の親密な交流は復興に向かう福島の大きな支えとなってきた。

本展では、芸術による地域創造研究所が主催して行ってきた「鯉アートのぼり」アートプロジェクトを紹介。東日本大震災から9年目の福島で、開催されてきた他の6つの文化芸術のムーブメントと一緒に、2011年以降の交流を未来に届けた。



(2) 「重陽の芸術祭 2019」企画監修

8月29日～9月22日：龍泉寺

重陽の芸術祭は「福島ビエンナーレ 2016」を契機に、二本松市で毎年開催されてきたアートイベント。日本酒に菊を浮かべて不老長寿を願う重陽の節句にアートで街を盛り上げてきた。今年はレオナルド・ダ・ヴィンチがフランスで亡くなって500年となることから「《モナ・リザ》と現代フランスの『肌膚』」と題して開催。二本松・橋本仏具彫刻で再現した額縁を用いて《モナ・リザ》の亀裂や裏面を油彩で描いた作品を展示。フランス現代作家は「版」の作品を展示。ルネッサンス期に開山した二本松の龍泉寺で、日本とフランスの美術の「肌膚」にスポットを当てた作品展。

出展作家：佐々木真紀子

鈴木美樹

俵典子

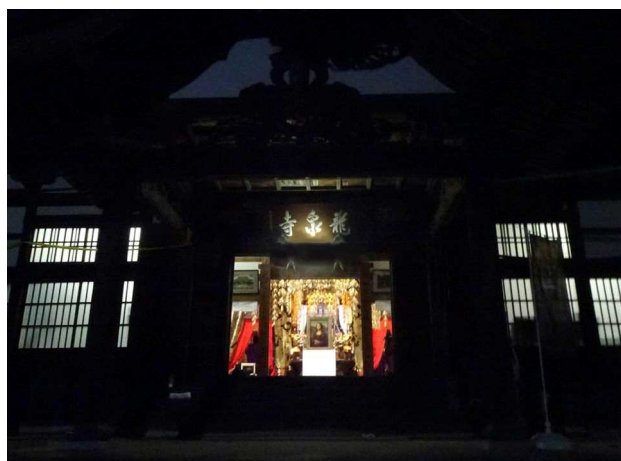
渡邊晃一

Alain Cazalis

Brigitte Kernaleguen

Dominique Aliadiere

Muriel Rigal



9月13日(金)開催時間：13:00 ~14:30



9月13日 パフォーマンス

「おばあさんのランチ・パン人間」

出演：折元立身

共催：ライフミュージアムネットワーク
実行委員会

(3) 「にほんまつ Art Fes」 協力

9月7日 ~9月9日：

二本松市コンサートホール、道の駅「安達」、
霞ヶ城公園 本丸跡、
二本松市市民交流センター

二本松市において開催されたアートの祭典。
コンテンポラリーダンス、朗読、彫刻ライブなど
二本松の素晴らしさを紹介。
研究所では、下記のコンサートホールの会場設
営やトークショーの進行を協力。

「妖艶 Bewitching」

- 9月7日(土) 二本松市コンサートホール
第一部：コンテンポラリーダンス「あどけない話」
ダンス 二瓶野枝
第二部：朗読「智恵子抄」
朗読 一色采子、ピアノ 田中健
第三部：共演「黒塚」
第四部：トークショー

なんか、地元でアートしよ。
にほんまつ Art Fes

二本松市コンサートホール
15:00-17:00 9.7 SAT
妖艶 Bewitching
第一部 コンテンポラリーダンス「あどけない話」
ダンス 二瓶野枝
第二部 朗読「智恵子抄」
朗読 一色采子、ピアノ 田中健
第三部 共演「黒塚」
第四部 トークショー
一色采子、二瓶野枝
田中健

11:00-16:00 9.8 SUN
道の駅「安達」(下り線)
●ワンコイン・ワークショップ開催
自由に描こう! 手形で作る万燈楼
●橋本仙真彫刻店・アーティスト
橋本和成 による彫刻ライブ

9.9 MON
第一部 13:00-
菊松くんのお誕生日を、お祝いしよう!
日本酒で乾杯 霞ヶ城公園 本丸跡 入場無料・自由参加
第二部 18:00-
ざくざく汁
振る舞い&出発式!
二本松市市民交流センター
日本酒ナビゲーターの
お店へよう!!

9.9 限定
菊松くんお誕生日
プレゼント!

- (4) 「二本松 浪江 交流のこれまで・これから」
協力
9月11日：二本松市市民交流センター
「ライフミュージアムネットワーク」企画

コミュニティ再生・ソーシャルインクルージョン統合プログラム

アーティスト折元立身氏を交え、福島大学の学生、浪江町・二本松市の方々と震災後の浪江町・二本松の交流について語り合うオープンデイスカッションを開催した。



(5) 公開シンポジウム「表現の不自由??」

主催
11月4日
福島大学行政政策学類棟大会議室

ファシリテータ：小野原 雅夫

(人間発達文化学類)

- 【話題提供者】垣見 隆禎(行政政策学類)
金井 光生(行政政策学類)
久我 和巳(行政政策学類)
阪本 尚文(行政政策学類)
永幡 幸司

(共生システム理工学類)

渡邊 晃一

(人間発達文化学類)

2. 今後の展望

2019年度は、東日本大震災後の芸術活動を紹介する企画が続いた。福島県は原子力発電所の事故によって、伝統的な文化が失われつつある中で、福島県立博物館が中心となり、様々な取

り組みを行っており、本研究所もその活動に支援してきた。

福島伝統文化をキーワードに開催した「福島ビエンナーレ」は、二本松で継続的に「重陽の芸術祭」として開催され、人々が幅広い芸術活動に触れ合い、交流する機会を設けると同時に、地域文化を活性化させ、新しい価値観を提供する機会を築いていった。

地域づくりと「21世紀の新しい生活圏」の創造を目指す本事業は、福島と芸術文化の関わりを通し、地域の文化活動を様々な角度から支援する機会を提供するものである。若い人たちが魅力を感じ、人と人との交流が活発になる芸術文化活動を促進する上で、福島の新しい地域創造に積極的に関与し、学生が地域文化を考える契機ともなってきた。

福島大学芸術による文化創造研究所は、今後とも現代の芸術活動をソフトの面から支援し、これまで構築した人のネットワーク、文化施設、産・学・官の連携により、福島からの文化発信の基盤を作っていきたい。

なお、今年度の活動は、新聞や雑誌、テレビなどで多数報道がなされ、全国で紹介された。

小規模自治体研究所活動報告書

所 長 塩谷 弘康

研究目的

小規模自治体研究所は、平成の大合併の時代にあっても、自立の道を選んだ小規模自治体が、その住民とともに持続可能な地域づくりをサポートしてきた。とりわけ、東日本大震災後には、それまで行ってきた、県内外の各自治体の首長や職員たちとの研究会・シンポジウムの開催といった学術的な研究・交流活動ばかりではなく、避難指示地域の女性農業者たちとともに「かーちゃんの力・プロジェクト」を立ち上げるなど、実践的な課題にも大胆に取り組んできた。東北地方のみならず、全国的にも珍しい「小規模自治体」に焦点を絞った研究所として、持続可能な農村地域・地方都市のあり方について、国際比較も加えた学術的研究とともに、小規模自治体の「現場」の課題に即した実践的な活動にも意欲的に取り組むこととする。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

塩谷 弘康
副学長
行政政策学類教授

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

千葉 悦子 行政政策学類名誉教授
岩崎 由美子 行政政策学類教授
佐々木 康文 行政政策学類教授
荒木田 岳 行政政策学類准教授
大黒 太郎 行政政策学類准教授

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

松野 光伸 福島大学行政政策学類名誉教授

研究活動内容

2019 年度の本研究所における研究・実践活動は以下のとおりである。

1. 飯舘村との協定に基づく活動

2017 年 4 月に、本学と飯舘村は、「まていな家協力協定書」を締結した。また、本学行政政

策学類は村と独自に「復興連携協定」を締結し、飯舘村帰村後の復興にむけて、大学と村とがこれまで以上に密接に協働することとなった。

小規模自治体研究所は、村と大学・行政政策学類との間にたつて、協定に基づく具体的な活動を企画・実施する役割を担ってきた。その際、

村や住民の要望に基づき、協働で活動を実施する、教員のみではなく、本学学生が活動の中心的メンバーとしてかかわる、1 年間の成果を「形」として残し、村や村民に対してその成果を報告する、との方針のもと、以下のプロジェクトを企画、実現した。

(1) 飯舘村自分史プロジェクト

2018 年度に飯舘村役場と協働で、村民 20 名の方々からその自分史を聞き取って冊子にする「飯舘村自分史プロジェクト」を今年度も継続して実施した。学生 20 名が村民 20 名をそれぞれ担当し、聞き書きした話を文章にまとめ、冊子体『飯舘村に生きて 20 人の軌跡』にまとめた。

プロジェクトへの関心も高く、震災研究者からの問い合わせを数多くいただいた。

(2) 飯舘村内集落との協働プロジェクト

2018 年度から始まった村内 2 集落(大久保外内、佐須)と協働での「ひまわり」と「えごま」の生産。本年度は、収穫物から搾油し、「えごま油」「ひまわり油」から「瓶詰食用油」「せっけん」の 2 商品を完成させた。とりわけ大久保外内地区は、本研究所や学生と協働で始めた「えごま」栽培に可能性を見だし、集落活動へと今後展開させていくことになっている。本研究所の活動が大きなきっかけとなったことは、大きな喜びである。

(3) 飯舘村 NPO との協働プロジェクト

本年は昨年度に引き続き、飯舘村の住民でつくる「NPO 法人もりの駅まごころ運営協議会」が主催する「安否確認・健康支援事業」に協力した。研究所メンバーや学生が、毎週 3 名ずつ NPO メンバーとともにチームを組んで、村内各

地の帰村者の自宅を訪問する活動を 2 年間続けたことになる。学生の地域活動を通じた学びと、学生による市民団体支援を両立させた貴重な活動となった。

2. 留学生のための福島研修旅行の企画・実施

本年度の新たな取り組みとして、本研究所の飯舘村など被災地での活動実績を活かす形で、被災地福島の現状を広く発信するための「留学生のための福島研修旅行」を企画し、実施した。

本年度は 6 月と 2 月の 2 度実施し、本学の交流協定締結校である国立台北大学と文藻外語大学の 2 大学から、合計 21 名の学生を受け入れた。飯舘村の協力者・団体、南会津町の田島第二小学校などの協力を得ながら、被災地の「食」に焦点をあてたプログラムとなった。田島第二小学校での「台湾デザートをみんなで一緒に作ろう！」という企画、また福島市の福島県観光物産館「コラッセふくしま」で開催した「台湾カフェ tarotaro」では、福島の食材を使って台湾料理を作り、提供し、参加者に大いに好評であった。企画・実施には、行政政策学類・地域政策科学研究科の学生による支援を得た。

3. 福島県内の地域づくり活動

当研究所では、自治体や地域からの依頼・要望にこたえる形で、研究メンバー単独で、あるいは福島大学生とともに、地域づくりを積極的に支援している。

2019 年度も、震災前から金谷川地域の住民と行っている「U プロジェクト」を継続的に活動した。また、本研究所は、地域と大学とが協働して農山村集落の再生に取り組む「域学連携」に力を入れており、県内各地の集落での実態調査やワークショップを重ねながら、「こどもマルシェ」や大学祭での地元野菜の販売などを行った。

4. 新たな研究活動の展開

持続可能な農村地域、小規模自治体の仕組みづくりを研究する当研究所は、震災前からの定期的な勉強会の実施に加え、震災後の新たな課題への学術的・実践的な取り組みを進める中で、「過疎」の歴史的研究、国際比較に取り組む必要性を強く実感してきた。今後も、実践と研究を結び付ける活動を展開していきたい。

松川事件研究所活動報告書

所 長 初澤 敏生

研究目的

松川事件にかかる資料の収集・整理を行うとともに、それを活用した研究を行う。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

初澤敏生（人間発達文化学類・教授）

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

金井 光生（行政政策学類・准教授）

熊澤 透（経済経営学類・教授）

小山 良太（経済経営学類・教授）

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

荒木貢（あぶくま法律事務所・弁護士）

今野順夫（福島大学名誉教授）

広田次男（広田法律事務所・弁護士）

安田純治（安田法律事務所・弁護士）

渡邊純（けやき法律事務所・弁護士）

研究活動内容

2019 年度の主要な活動は以下の通りである。

1. 松川事件 70 周年事業への協力

今年度は松川事件が発生してから 70 周年に当たったため、松川記念会を中心として 70 周年記念事業が行われ、研究所もこれに協力した。特に 9 月 21・22 日に行われた記念シンポでは延べ 1000 人を超える参加者を得て、成功裏に終了することができた。また、同期間中は人間発達文化学類大会議室において「松川資料展」も開催し、200 人以上の入場者があった。

これと合わせてマスコミ各社より多くの取材依頼を受けた。県内の新聞社テレビ局にとどまらず、北海道新聞など他地方からも取材を受けた。この結果は、北海道新聞 6 月 6 日版、福島民友 8 月 15 日版、朝日新聞 8 月 19 日版、Japan News（読売新聞英字版）9 月 2 日版などに掲載された。各紙とも、非常に好意的に報道していただいた。松川事件に対する関心は、まだ薄れていないと実感した。

2. 資料の整理・保存

今年度の特徴ある活動として、以下の 3 点を挙げられる。

「大塚一男資料」の整理

松川資料室研究員の先生方のご協力を得て、未整理のままとなっていた「大塚一男資料」の整理を行った。大塚一男資料は既に書籍等の整理は行われていたものの、段ボール箱 20 箱以上に及び、未整理の手紙類やノート類などの資料が残されていた。現在、整理は終わり、目録を作成する段階へと入っている。

保存資料の整理

これまで、資料室の中にオリジナル資料と研究用資料が混在しているなど、保存上好ましくない状態となっていた。これを解消するため、資料をオリジナル資料とその他の資料とに区分し、資料室ではオリジナル資料に限定して整理・保存を行うように改めた。早期の整理完了を目指し、作業を進めている。

貴重資料の保存処理

事件から 70 年が経過し、各種資料の劣化が進んでいる。これまでに「諏訪メモ」や「最高裁判所調査官報告書」などの貴重資料の長寿命化処理を行ってきたが、今年度からは「門田實裁判長資料」の長寿命化に着手した。「門田實裁判長資料」は分量が多いために完了には数年かかる予定である。

3. 著作権保護体制の強化

今年度より、著作権に関する法務担当者の支援を受け、著作権管理体制を強化した。合わせて松川記念会と協力して資料の著者者に対し、その利用許可を求める活動を開始した。これは今後の世界記憶遺産申請を進めるために必要な作業であることに加え、資料を研究において活用するためにも不可欠の作業である。しかし、既に故人となられている方も多く、著作権者の確定が困難である資料も少なくない。できるところから進めていく予定である。

4. その他

今後のユネスコ世界記憶遺産申請に向けて資料の精選を進めている。その中には補修が必要なものも少なからずあり、今後優先的に対応していく予定である。

福島大学地域スポーツ政策研究所活動報告書

所 長 蓮沼 哲哉

研究目的

本研究所では、「地域・クラブ・共生」型スポーツ政策への転換をコンセプトに、地域の自主的・主体的取組みを基本とし、理論と実践の両面からアプローチしていくことを目的として活動しています。

地域において、スポーツは誰にでも、いつでもできる環境が用意され、個人で健康増進、体力向上に取り組むことができるようにすべきだと考えています。現代の生活習慣から、子どもから高齢者まで運動離れが叫ばれ、子どもの体力低下は重要な問題となっています。福島においては、その原因が震災の影響と関連性があることも考えていかなければなりません。さらに、2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催が決まり、「復興五輪」という目的を果たすために福島が取り組むべきスポーツ政策など、地域スポーツの発展とトップスポーツについても考えなければなりません。

そこで、国内をはじめ福島県内の地域のスポーツの発展に関する研究や高齢者やハンディキャップを持つ方の健康増進・体力向上、地域におけるトップアスリートの好循環、地域におけるスポーツイベントの効果などについて研究や実践をしています。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

蓮沼 哲哉 人間発達文化学類・准教授

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

安田 俊広 人間発達文化学類・教授

鈴木 裕美子 人間発達文化学類・特任教授

小川 宏 人間発達文化学類・教授

（令和 2 年度より）

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

赤木 弘喜

（一社）アグロエンジニアリング協議会

研究活動内容

【うつくしま広域スポーツセンター事業

総合型クラブ：大玉スポーツクラブとの連携事業】（蓮沼）

福島県体育協会うつくしま広域スポーツセンターから依頼を受け、大玉村の総合型クラブ「大玉スポーツクラブ」と連携事業を行ないました。毎月の運営委員会に学生を派遣し、事業の進捗の確認や新たな事業へ助言をしたり、クラブの課題抽出のために会員アンケートを実施し、フィードバックしながらクラブ運営がよりスムーズにいくように協議しました。派遣された学生にとっては、総合型クラブに直接関わることで実践力を養うことができました。

【スポーツを活用したコミュニティ振興

～農スポまちづくり～】（赤木、蓮沼）

「農業界」と「スポーツ界」ふたつの業界が手を組み、それぞれの課題を解決するとともに、新たな価値を生み出す仕組みを構築するために「農業×スポーツ」を社会にポジティブインパクトを与えるアスリートのセカンドキャリアの研究として、福島市松川町の商工会議所や農業法人と連携する事業を開始しました。アスリートが地域での農業に従事し、地域の農業法人などと連携し、農業をデュアルキャリア、セカンドキャリアとしながら学校の部活“外部指導員”や総合型地域スポーツクラブで“監督・コーチ”としてスポーツ指導にあたることのできないかなど研究を進めていきます。1 年目としては、松川町で開催するスポーツイベントからこの地域のスポーツに対する意識や地域資源の調査、また「農業×スポーツ」先進地域への視察などを行いました。次年度以降も継続して研究と実践を通し、松川町を「農業×スポーツ」の先進モデルとなるように進めていきたいと思ひます。

【農スポ関連セミナー開催】

「農業分野における担い手・労働力確保の
取組について」

日時：令和元年 10 月 29 日（火）

講師：齊藤 充生氏（農林水産省経営局）

「スポーツがあってよかった社会を創る・
かいぶつプロジェクト」

日時：令和 2 年 1 月 22 日（水）

講師：三橋亮太（元プロサッカー選手）

㈱I.D.D.WORKS 代表取締役

住澤祐樹（元リージュ日本代表）



**【健康寿命を延ばす楽しい運動プログラム】
（鈴木）**

昨年度と同様、郡山市立橋地域公民館から要請を受けて、「橋ときめき大学」の事業の一環として、50 歳以上の高齢者を対象に公民館にて健康体操を実施しました。認知症予防としてお手玉や脳トレ体操、寝たきり予防としてアイソメトリックトレーニングやレッグランジ、筋肉体操などの筋トレ、若さを維持するためにかかと落としやパカパカ体操などの骨体操の方法を紹介しました。健康寿命を延ばすための 10 の生活習慣を勧め、運動の有効性を強調し、具体的な方法について実習しました。

【リズムに合わせて楽しい骨体操】（鈴木）

昨年度と同様、二本松市生涯学習課から要請を受けて、「人生 100 年時代、知って得する健康講座」の一環として、一般成人対象に二本松文化センターにて健康体操を実施しました。人生 100 年時代、楽しく生活を送りながら健康寿

命を延ばすための運動を提示しました。姿勢をよくし、若さを維持し、骨粗鬆症を予防するための「骨体操」を中心に、認知症を予防するための「脳トレ」、寝たきりを予防するための「筋トレ」の運動も併せて紹介しました。

【科学をダンスで表現する】（鈴木）

郡山市ふれあい科学館から要請を受けて、福島大学と郡山市ふれあい科学館連携事業「おもしろ科学びっくり箱」として、科学館にて幼児～中学 3 年生対象にダンスのワークショップを実施しました。科学館で展示している宇宙、恐竜などを題材にして体で表現し、最後はグループに分かれて作品を創作し、発表会を行いました。科学とダンスのコラボを行い、双方向からのアプローチをとおして、子ども達に科学にもダンスにも興味を持ってもらえるよう展開しました。感想に「科学のことをダンスを通して知れました」とあり、手応えを感じました。

【さわやかシェイプアップ教室】（鈴木）

信夫学習センター登録のサークルで、ストレスに強い主婦を目指す健康体操サークルの指導を行いました。月 2 回の例会で、体ほぐし、ストレッチ、楽しいスクワット、手遊び、脳トレ、筋肉体操、骨体操、腰痛体操、ヨガ、かかと落とし、レッグランジ、ランニング、ダンス、チューブ体操、くねくね体操、がにがに体操などを実施しました。健康情報や参加者からの質問に応じた健康講話（転倒しない歩き方、足底筋の鍛え方、坐骨神経痛の予防など）も実施しました。

【高齢者対象運動教室】（安田）

伊達市が行う高齢者を対象とした介護予防運動教室に毎年体育科の学生がスタッフとして参加しています。

H31/R2 年度は週に 1 回 12 週間の運動教室が全部で 6 セット行われ、学生は毎回のトレーニング指導、体力測定、筋力測定のサポートを行いました。高齢者や低体力者に対する運動指導の現場を体験する良い機会となっています。特に

要支援者に認定されている人を対象とした運動指導を経験する機会は多くないため、学生は良い経験をしたことでしょう。教室に参加した方のほとんどは、筋力・体力の向上や血圧低下などの健康増進効果を得る事が出来き、今後は恒常的に実施される運動教室に移行していきます。

【地域住民を対象としたバドミントン・ダンス教室支援】(安田)

昨年度と同様、伊達市霊山で実施されたバドミントン教室に本学のバドミントン部の学生がスタッフとして参加しました。初心者を対象とした全 6 回の教室に参加して、球出しやヒッティングパートナーを務め、計 6 回実施することができ、地域を盛り上げることができました。また令和 2 年度からキッズ・ダンス教室のサポートも開始しました。

【2019 Power up Japan from Tokyo

いわて・みやぎ・ふくしま 三県合同サッカーフェスティバル in J ヴィレッジ開催】

東京都/日本アスリート会議と連携し、東日本大震災で被災した岩手県・宮城県・福島県の三県の中学生を J ヴィレッジに集め、そこで合同チームを作り、行動を共にすることにより、復興に対する思いを共有し、共に助け合える仲間の存在を実感し、行動していくことを目的としたスポーツイベントを実施しました。イベントでは、アスリートの指導を受け、トップレベルの技術を学び、世界で戦った体験談を聞き、スポーツを通して夢と希望を持つことの大切さや初めて会った仲間とゲームを通して心を通い合わせていくことから生まれる協調性や一体感などを味わうことができました。



【スポーツボランティア実態調査】

東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、福島県内において実施されたボランティア研修に参加した人を対象にした実態調査を行いました。東京 2020 大会を目の前にし、研修会に参加する人の多くは、都市ボランティアとして参加を予定し、県内のスポーツボランティアへの意識は高まってきていることが感じられました。

【総括】

東京オリンピック・パラリンピック開催を目の前にし、オリンピック開催機運の醸成をする事業が多数開催されていましたが、新型コロナウイルス感染拡大により 1 年開催延期となり、イベント開催は一気に中止、自粛となってしまいました。しかし、本研究所が担う役割は、この状況からスポーツが生み出すチカラをあらためて研究していくことであり、引き続き、地域、様々な組織・団体と手を取り合って協働・共生していきたいと思えます。

災害心理研究所活動報告書

所 長 筒井 雄二

研究目的

原子力災害による放射線被ばくに対する不安や恐怖が人々の心理的健康と子どもたちの発達に及ぼす影響のメカニズムを明らかにする。これにより、原子力災害が引き起こす心理的影響をより小さくするために有効な心理学的対処方略を開発する。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

筒井雄二（福島大学共生システム理工学類・教授）

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

高谷理恵子（福島大学人間発達文化学類・教授）

富永美佐子（福島大学人間発達文化学類・准教授）

本多 環（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター・特任教授）

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

氏家達夫（放送大学愛知学習センター・特任教授）

木下富雄（京都大学名誉教授、(財)国際高等研究所フェロー）

坂田桐子（広島大学大学院総合科学研究科・教授）

元吉忠寛（関西大学社会安全学部・教授）

研究活動内容

科学研究費補助金 基盤研究(B)（研究課題名） 原発事故に関連する放射線不安はなぜ消えないのか：精神影響長期化のメカニズムの解明（研究代表者：筒井雄二）（課題番号：17H02622）

本研究プロジェクトは福島第一原子力発電所事故からおよそ6年後にスタートし、今年度は研究の3年目にあたる。東京電力福島第一原子力発電所における原発事故は、福島で暮らす母子に放射線不安やストレスなど、心理学的影響を長期にわたり引き起こしてきた。本プロジェクトでは、そのような原発事故に起因すると

考えられる心理学的影響のメカニズムを解明することを目的としている。

昨年度の研究で我々は、原発事故と関連する放射線不安や心理的ストレスが、生来の生物学的メカニズムによって引き起こされた可能性について検討を行った。Schaller & Duncan (2007)によれば、人間は健康を害する可能性のある毒物や化学物質、あるいは放射能から行動的に忌避するメカニズムを生得的に有している。この仕組みは行動免疫システムとよばれ、本来は有害なものを怖がらせ、そこから我々を遠ざけることで、結果的には我々の生存を助けるメカニズムとして機能している。しかし、その一方で、行動免疫システムが不安やストレスを喚起する仕組みであると考えれば、原発事故に関連する心理的問題の誘発にも関わっている可能性が考えられた。

そこで、放射線に対する危険知覚のレベルと個体特性としての感染嫌悪傾向の関係を調べた。福島県内で子どもと暮らす母親と東京都内で子どもと暮らす母親を対象に調査を実施したところ、原発災害に関連するとみられる心理的影響は放射線に対する危険知覚と密接に関わる一方で、危険知覚は個人の感染脆弱性のレベルに影響を受けていることがわかった。

原発事故に起因すると考えられる心理学的影響が危険知覚と密接な関係があり、危険知覚の強さが個人の感染脆弱性に影響を受けるという仮説が正しいとするならば、過去に発生した原発事故と心理学的影響の関係にも、この仮説があてはまり、仮説の確からしさを検証することができるだろうと考え、令和元年度の研究では、チェルノブイリ事故に関連した心理学的影響における行動免疫システムの役割について研究を行った(現在、研究データを分析中)。

Yahoo! Japan「Search for 3.11 検索は応援になる」の寄附を利用した研究（報告書より抜粋）

原発事故を経験した福島県で、子どもを育ててきた（育てている）母たちの声、若者たちの声を、ホームページを通して全国にむけて発信するプロジェクトを企画、実施した。これまであまり語られることのなかった原発事故の経

験者の声を作文として集め、福島の人々があのときどんなことを経験し、どんな日々を暮らしてきたのか、9年後の現在の状況はどのようなのかなど、福島の人々の声を通して、福島の現状を皆さんに伝えていく必要があると考えた。

これまでの私たちの調査では、心理的ストレスや放射線不安を心理尺度を通して測定する方法を採用した。しかし、それらのデータは福島で暮らす人々の心理の、ほんの一部にものさしをあてて得られたに過ぎない情報だと考えられた。事故から9年が経過したこの段階で、少しずつでも人々の本当の心のうちを聞くことができるとするならば、それらは原発事故による心理的影響を考える上で貴重な資料となるだけでなく、福島の現状や原発事故がいったいどんなものであったのかを人々に訴える貴重な資料となるはずだと考え、今回のプロジェクトを企画した。

12月4日に福島大学の定例会見の場で、当該プロジェクトの開始について公表し、そのことを福島中央テレビがニュースと情報バラエティ番組の両方で報じた。また、福島民報が12月5日朝刊で、読売新聞が12月8日の朝刊でプロジェクトの内容をそれぞれ報道した。森まさこ法務大臣は報道当日(12/5)に自身のツイッターで本プロジェクトについてツイートし、またフェイスブックでもプロジェクトのことを紹介した。

最終的に41通の貴重な作文が寄せられ、39通が公開されている。残りの2通は、福島で暮らす母親からの投稿で、残念ながら非公開を希望していた。公開を希望していないにも関わらず、自分の気持ちを文章としてまとめ、送られてきた2通の意味は非常に重いと我々は考えている。すなわち、福島で生活する母親たちは、自分たちの胸の内を、本当は誰かに聞いてほしいと思っている。しかし、一方で誰にも分ってもらえないという苦しさから抜け出すことができていない。自分たちが経験した恐怖と不安の日々を誰かに訴えたいと、誰もが思っている。このことは、我々がこのプロジェクトを通じて強く感じたことであった。

福島大学資料研究所活動報告書

所 長 黒沢 高秀

研究目的

福島大学で所蔵している研究資料や郷土資料の適正保管や活用を図るとともに、図書資料や各種情報と結びつけ、教育・研究・地域との連携を推進する。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

黒沢高秀（共生システム理工学類・教授）

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

菊地芳朗（行政政策学類・教授）

阿部浩一（行政政策学類・教授）

塘 忠顕（共生システム理工学類・教授）

徳竹 剛（行政政策学類・准教授）

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

澁澤 尚（人間発達文化学類・教授）

小松賢司（人間発達文化学類・准教授）

笠井博則（共生システム理工学類・准教授）

難波謙二（共生システム理工学類・教授）

鍵和田賢（人間発達文化学類・准教授）

研究活動内容

大学貴重資料の整理・活用

昨年に引き続き、経済経営学類と協力して、福島高等商業学校資料を整理し、目録及び資料概要に関する報告書を完成させた。

FURE（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター）資料保管室から福島大学貴重資料保管室への資料移転を支援すると共に、戦国大名伊達氏の研究で著名な小林清治名誉教授の旧蔵資料の再整理を継続した。

福島大学貴重資料保管室植物標本室 FKSE では 2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日の間に、のべ 8 名の学外の研究者の訪問利用があった。また、行政から 3 件と研究者から 4 件の標本データベースのデータの照会に対応した。FKSE で管理している標本を用いて、植物のさく葉標本から非破壊的に DNA を抽出する方法を開発した（Sugita et al. 2019）。内容について大学の定例記者会見で発表し、新聞（福島民友、福島民報、いずれも 2020 年 1 月 25 日）や子ども向け科学雑誌（『子供の科学』2020 年 4 月特大号）などに取り上げられた。2019 年 10 月 12 日の台



図1 小林清治名誉教授旧蔵資料の再整理の様子。2019 年 7 月 9 日撮影。

風 19 号の水害で浸水被害にあった植物標本の修復に国内の 8 博物館・大学とともに取り組み、研究所研究メンバーが取りまとめ役を担った。福島大学学内競争的研究資金(19RI025)の助成を受け、過去に寄贈を受けた福島女子高等学校、保原高等学校、梁川高等学校のさく葉標本の整理を行った。

ふじのくに地球環境史ミュージアム企画展「大絶滅 地球環境の変遷と生物の栄枯盛衰」（会期：2019 年 11 月 30 日～2020 年 4 月 5 日）にニホンカワウソの剥製を貸し出しするなどの協力を行った。

なお、今年度は主催展示事業、後援事業はなかった。

HP による情報発信

HP（http://www.sss.fukushima-u.ac.jp/kurosawa/IUMC_Fukushima_Univ/fukushima_ac.html）で本研究所および研究所研究メンバーの活動を紹介するとともに、県内を中心とする貴重資料や関連行事のニュース 12 件などを「お知らせ」欄などに掲載した。

大学貴重資料を活用した研究一覧

以下に 2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日の間に出版された資料研究所研究メンバーが管理する貴重資料を活用して行われ、資料が出版物内に引用または明記された研究成果の一

覧を示す。下線は研究メンバー，*は研究メンバー以外により行われた研究を示す。

早川宗志・井原希・根本秀一・茨木靖・小川誠・黒沢高秀。2019. ホシアサガオ，マメアサガオ，マルバアメリカアサガオ（ヒルガオ科）の日本への初帰化年代。雑草研究 64: 5-8.

*Mizusawa, L., Ishikawa, N., Yano, O., Fujii, S., Isagi, Y. 2019. Geographic distribution of ploidy levels and chloroplast haplotypes in Japanese *Clerodendrum trichotomum* s. lat. (Lamiaceae). Acta Phytotaxonomica et Geobotanica 87: 87-102.

齋藤佑樹・黒沢高秀。2019. 福島県白河大池とその周辺の植物相。福島大学地域創造 31(1): 133-160.

*兼子伸吾。2019. 絶滅種？外来種？80年前の標本からイワキアブラガヤの由来を探る。ミルシル 12(9): 11-13.

*持田誠・池田守・池田順子。2019. 北海道十勝地方からマルミノウルシを記録する。浦幌町立博物館紀要 19: 13-15.

Sugita, N., Ebihara, A., Hosoya, T., Jinbo, U., Kaneko, S., Kurosawa, T., Nakae, M. & Yukawa, T.. 2020. Non-destructive DNA extraction from herbarium specimens: a method particularly suitable for plants with small and fragile leaves. Journal of Plant Research 133: 133-41.

黒沢高秀・根本秀一・山下由美・蓮沼憲二・伊賀和子。2020. 福島県における新たなレッドリスト改訂手順の試みとそれに基づくふくしまレッドリスト(2018年版)植物(シダ植物,種子植物)の作成。福島大学地域創造 31(2): 75-86.

大学貴重資料に関する記事や報道

以下に2019年4月1日~2020年3月31日の間に発表された資料研究所の活動や研究メンバーが管理する貴重資料に関する解説記事や報道の一覧を示す。

「福島で浸水 植物標本修復」(読売新聞茨城県版, 2020年1月12日版)

「押し葉標本に新手法 福島大と国立科学博物館研究チーム 傷つけず DNA 採取」(福島民報, 2020年1月25日版)

「標本傷つけず分析 福島大准教授ら DNA 抽出新手法」(福島民友, 2020年1月25日

版)
「貴重な標本を傷つけることなく DNA を抽出」
(子供の科学 2020年4月特大号 5ページ,
斉藤勝司)

磐梯朝日自然環境保全研究所活動報告書

所 長 塘 忠 顕

研究目的

磐梯朝日国立公園において、植生遷移、火山活動、気候変動、人間の土地利用、水利用が自然環境に及ぼす影響の実態把握と将来予測を行い、現在の自然環境を維持・保全・改善するための方策を明らかにする。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

塘 忠 顕（共生システム理工学類教授）

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

長橋良隆（共生システム理工学類教授）

黒沢高秀（共生システム理工学類教授）

柴崎直明（共生システム理工学類教授）

木村勝彦（共生システム理工学類教授）

川越清樹（共生システム理工学類教授）

高貝慶隆（共生システム理工学類教授）

横尾善之（共生システム理工学類准教授）

兼子伸吾（共生システム理工学類准教授）

川崎興太（共生システム理工学類准教授）

< 連携研究者（プロジェクト客員研究員） >

藪崎志穂（総合地球環境学研究所研究基盤国際センター研究員）

研究活動内容

HP による情報発信

研究所のメンバーによる現地調査、研究論文・報告書、学会発表、研究所のメンバーが支援した活動などを HP により紹介した。

現地調査活動

裏磐梯地域、表磐梯（猪苗代）地域での昆虫相や土壌動物相調査、裏磐梯地域・猪苗代地域

産の植物相調査、外来植物の駆除活動、裏磐梯地域や猪苗代地域の大型湖沼、小規模な池沼での地下水位観測および地下水流動解析、複数の湖沼を対象とした水質観測結果の複数年の比較、磐梯山麓の野外地質調査およびこれまでに採取した猪苗代湖底質の放射性セシウム濃度の測定、裏磐梯地域の積雪に関する分析等を行った。



研究論文等の公表

表磐梯地域を流れる長瀬川の底生動物相、猪苗代湖底堆積物（INW2012 コア）に挟まる火山性イベント層からみた磐梯山と安達太良山の過去 5 万年間の噴火活動の再評価（2019 年 7 月 23 日付の福島民友・福島民報に記事掲載）、裏磐梯の来訪者特性に関する内容などで、研究所のメンバーあるいはメンバーの研究室の院生が 6 本の論文を公表した。

研究成果発表等

第 79 回日本昆虫学会大会、第 2 回アザミウマ研究会 地学団体研究会第 73 回総会（東京）、日本惑星科学連合 2019 年大会（JpGU2019）、日本地質学会第 126 年次学術大会、第 9 回同位体環境学シンポジウム、令和元年度土木学会東北支部技術研究発表会、第 40 回菅平動物学セミ

ナー、猪苗代湖学県民講座、フォレストパークあだたらふくしま生き物調査発表会 2019 など
で研究所のメンバー、メンバーの研究室の院
生・学類生が研究成果を発表した（全部で 14
件）。

研究所の研究成果報告会は 2020 年 3 月 8 日
に北塩原村休暇村裏磐梯天文台ホール会議室
にて開催した。裏磐梯地域の動物・植物、地下水
流動、湖沼の水質、表磐梯地域を流れる長瀬川
の底生動物、猪苗代湖の湖底堆積物の分析に基
づく安達太良山や磐梯山の活動履歴に関する 6
題の研究成果が報告された。新型コロナウイルス
の感染拡大防止から、県内外の多くのイベン
トが延期・中止となる中での開催だったが、学
内者 12 名、学外者 27 名の合計 39 名の参加者
があり、活発な意見交換ができた。



助成研究に関する成果

株式会社ニチレイより、2 件の応募研究課題
（黒沢高秀：『裏磐梯植物誌』出版を目指した
植物の種多様性研究、塘 忠顕：裏磐梯地域に
ある株式会社ニチレイ社有地内のヨシ湿地の
昆虫相解明）に対して研究費が助成された。

裏磐梯の植物の種多様性に関する研究では、
キヨスミウツボ、アラゲヒョウタンボクなど新
たに 18 種類の植物を確認し、2004 年以降に確
認された植物が 905 種類、うち絶滅危惧植物 42
種類、侵略的外来植物 31 種類となった。

ニチレイ社有地内のヨシ湿地の昆虫相に関
する研究では、予想に反して採集される昆虫類

の多様性が低かったため、昨年度からの継続課
題である土壌動物相調査を進め、土壌性カニム
シ相を解明した。5 地点の土壌から得られた 728
個体を同定した結果、5 属 6 種を認めた。また、
優占種 2 種の生活史を推定したところ、2 種と
も平地とは異なり、成体になるまで 1 年以上を
要する可能性が示唆された。

その他の活動

裏磐梯地域で福島県自然保護課が開催した
研修会で黒沢が外来植物の現状と課題につい
て講演した（令和元年度福島県野生動植物保護
サポーター研修会：2019 年 8 月 30 日）。

日本大学工学部で開催された猪苗代湖学県
民会議で長橋と塘が猪苗代湖湖底堆積物や流
入河川である長瀬川の底生動物に関する研究
成果について講演した（2019 年 8 月 31 日）。

塘と研究室の学生が、表磐梯地域を流れる長
瀬川、特に酸性水域における底生動物相を調査
し、表磐梯地域の長瀬川を特徴付ける底生動物
を解説するミニ・ガイドブックを作成した。ガ
イドブックは、流域の関係団体や関係者、裏
磐梯ビジターセンター、猪苗代水環境センター、
アクアマリンいなわしろカワセミ水族館に提



供した。

環境省モニタリングサイト 1000 事業におい
て、猪苗代湖サイトの陸水域調査（湖沼）水生
植物調査を行った（2019 年 9 月 21 ~23 日）裏

磐梯曾原エリア（曲沢沼）でのコカナダモ駆除活動（2019 年 9 月 5 日）、猪苗代湖の漂着水草回収（2019 年 10 月 20 日）に黒沢研究室の教員や学生などが参加した。これまでの植物相調査の結果が国や自治体に情報提供され、福島県のレッドリスト改訂（ふくしまレッドリスト（2019 年版））や環境省による磐梯朝日国立公園の指定植物の見直し案作成など、環境行政に活用された。

福島県方言研究センター活動報告書

所 長 半 沢 康

研究目的

本センターの 2019 年度研究目的は以下の 3 点である。

- (1) 福島県浜通りおよび北部阿武隈高地の方言談話資料の収集と当該方言の記述・分析
- (2) 福島県方言の言語地理学的研究
- (3) 被災地方言の保存・継承活動に長期的に取り組むための研究者ネットワークの構築

周知の通り、福島県太平洋沿岸の浜通り地方は東日本大震災において広く津波の被害を受けるとともに、東京電力の原子力発電所事故により、多くの自治体の住民が避難生活を強いられた。事故の被害は沿岸部にとどまらず、飯舘村、川俣町山木屋地区、葛尾村、田村市都路町、川内村といった阿武隈高地北部の各地へも及んでいる。

福島大学では 2012 年から 17 年にかけて文化庁の委託を受け、被災地域各地の方言談話資料収集調査に取り組んできた。当初は県内他地域に設置された仮設住宅を訪問したり、県外避難をされている方々のもとを訪れたりして聞き取り調査を実施してきたが、近年は多くの避難指示地域で空間放射線量が低減して各地で指示の解除が進み、被災自治体を直接訪問することが可能となってきた。

避難指示が解除された地域の中には、事故前の 80% 近い人口が帰還した地域がある一方、商業施設や医療機関など生活インフラ復旧の遅れ等の影響で住民の帰還が捗らない地域も存在する。こうした地域では住民帰還の呼び水として積極的な交流人口の拡大を模索しているところが多く、教員が学生とともに被災地を訪れ、方言調査を実施すること自体が直接被災地域の復興の一助となりうる。

今年度も従来同様、避難指示解除地域にお伺いし、方言談話資料を収集することを通して被災地の支援に取り組むことを目的とした(目的(1))。

また今年度は新たに学内競争的研究資金を得て、県内の言語地理学的研究を実施する(目的(2))。2010～2015 年にかけて国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(以下 FPJD)が行われ、その成果は

『新日本言語地図』(以下 N-LAJ)として結実した。この調査は『日本言語地図』(以下 LAJ)および『方言文法全国地図』(以下 GAJ)の追跡調査であり、30 ないし 50 年間の方言変化、分布変動の状況を把握することを企図したものであった。今回は福島県内の未調査地点において補完調査を実施し、県内方言分布の現況を把握するとともに「狭域における微視的な方言変動の実時間比較」を行うものである。

目的(3)については、すでに県内の方言研究者および県外の福島方言研究者と連携し、長期的に県内被災地方言の保存・継承活動に携わるための基盤整備を行ってきた。本年度はさらに福島県方言の研究を推進するための具体的な体制づくりに取り組む。

研究メンバー

<研究代表者(研究所長)>

半沢康(人間発達文化学類・教授)

<研究分担者(プロジェクト研究員)>

中川祐治(人間発達文化学類・准教授)

白岩広行(立正大学・文学部・講師)

<連携研究者>

小林初夫(福島市岡山小・教諭)

このほか、科研費の分担者として、玉懸元(医療創生大・教養学部・教授)、本多真史(奥羽大学・歯学部・講師)、佐藤亜実(東北文教大学短期大学部・講師)が恒常的に活動に参加した。

所属等は 2019 年度のもの

研究活動内容

本年度はプロジェクト研究所研究経費および学内競争的研究資金(個人研究助成)を得て、以下の活動を行った。

(1) 被災地方言の談話資料収集

引き続き県内被災地方言の自然談話資料収集を実施した。被災地方言を継承するという観点から、各地の方言の全体像(音韻、文法、語彙、アクセント、イントネーション)を精緻に把握することが不可欠である。これまでのデータに加え、さらなる談話資料の蓄積を図った。

さらに被災自治体の依頼を受け、集落ごとの方言差を記録し、地域のより詳細な言語文化を

記録するために、当該地域の方言分布を把握するための言語地理学的調査にも着手した。

従来同様、避難指示が解除されて住民の帰還が始まった地域に赴き、被災された方々の傾聴支援を兼ねての調査である。

(2) 福島県方言の言語地理学的研究

FPJD は全国 500 地点以上を対象として実施され、畿内や江戸・東京など全国的な中心地域からの方言伝播や、広域での新形発生・普及といった大規模な分布変動を把握することができたが、都道府県内の変化など狭域での方言動態を把握するには調査密度が小さすぎた。福島県は県内に複数の「中心地」が存在するため、方言の相互伝播や干渉、混淆による新形の発生など、方言形成論的にも興味深い現象が認められる。こうした地域の詳細な実時間データを収集することで、方言の伝播、形成にかかわる理論構築のためのデータを提供することができる。

福島県を含む各地の方言は共通語の普及により危機言語化が進んでおり、記録、保存を急がなければならない。戦後生まれの方が 70 歳を超え始めた現在はデータ収集の最後のチャンスであり、調査は喫緊の課題となっている。

そうした問題意識のもと、LAJ および GAJ の調査地点中、FPJD において調査できなかった福島県内の地点を対象に臨地面接調査を実施し、N-LAJ よりも地点密度の濃い方言地図を作成し、県内の方言分布の変動、新方言の発生と伝播の状況を把握した。現在報告論文を執筆中である。

(3) 方言研究者ネットワークの構築

今年度はさらなる福島県方言研究の進展をめざし、関係者の協力のもと、新たに「福島県方言研究会」を立ち上げた。福島県およびその周辺地域の方言研究促進と研究者相互の交流を目的とするもので、年に 1 度福島県内において研究発表会を開催する。第 1 回の研究発表会を 2020 年 3 月 29 日(日)に福島大学において実施する予定であったが、今般の covid-19 蔓延の影響で開催を延期した。状況が改善され次第開催の予定である。

研究成果

<学術論文>

白岩広行 2019 「福島県北部方言の「ようだ」」
『阪大社会言語学研究ノート』16, pp.1-14

半沢康 2020 「福島県における r 脱落現象の伝播と変化」『国語学研究』59, pp.1-15

<口頭発表>

半沢康「『庄内浜荻』調査データの多変量解析」
日本地理言語学会第 1 回大会(青山学院大学), 2019.10.6

イメージング（見えない物を見る）研究所活動報告書

所 長 平 修

研究目的

食と健康について科学的に解明する。健康長寿、健康寿命を食の観点から追求する。現代は、病気になれば、薬で治療するのが常である。しかし、2050 年には国内 65 歳人口が 4 割を超え、医療費の負担は賄いきれず財政破綻すると予測されている（内閣府調べ）。病気を予防し、健康維持するには、食の機能に頼るしかないと思者は考える。本研究所は、食の機能の見える化を研究の鍵とし、(1)食品の何処にうま味、栄養、機能生成成分が含まれるのかを解明し、食品の高付加価値化を図る。これは、県内外の食品（農産物）を標的とする。

(2) 食品含有機能性成分を摂取することで、脳神経疾患発病を予防・遅延させる機序を解明し、将来的に健康寿命を食により延ばすことを目的とする。

研究メンバー

< 研究代表者（研究所長） >

平 修（福島大学農学群・食農学類・教授）

< 研究分担者（プロジェクト研究員） >

吉永和明（福島大学農学群・食農学類・准教授）

高田大輔（福島大学農学群・食農学類・准教授）

研究活動内容（2019 年度）

・2019 年 5 月 13 日に国際質量分析セミナー（一般公開）をコラッセ福島にて開催した。

国内外から分析化学の一流研究者を招き講演を行った（言語は英語）。当日は 124 名の参加者に足を運んでいただき盛況のうちの幕を閉じた。下記にプログラムとポスターを示す。

Scientific Program

17:00- Start the registration

17:30-17:35 Opening remarks (Prof. Daisuke TAKATA)

First Session (S. TAIRA as chairman)

17:35-17:55 Dr. Shannon Cornett (Bruker Daltonik GmbH)

'Imaging mass for Food Analysis'

17:55-18:20 Prof. Dimitri Heintz (University of Strasbourg)

'Plant Imaging Mass Spectrometry (PIMS)'

18:20-18:35 Coffee Break

Second Session (K. YOSHINAGA as chairman)

18:35-19:00 Prof. Naohiro Gotoh,

(Tokyo University of Marine Science and Technology)

'Imaging of administrated DHA and arachidonic acid in mouse brain'

19:00-19:25 Prof. Laura Sanchez (University of Chicago Rockford)

'Imaging mass spectrometry in plant microbial pathogens reveals chemical crosstalk'

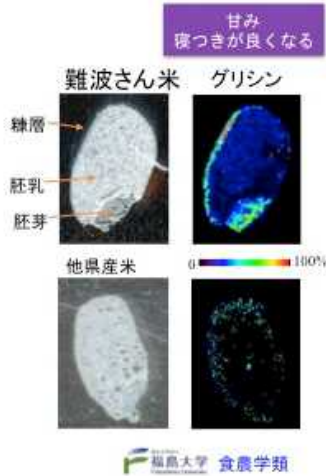
19:25-19:30 Closing address (Prof. Shu Taira)



福島県産米の見える化

・県内の農家に協力を依頼し、各地域のお米成

分のイメージングを行う。「鉄腕ダッシュ」のお米生育指導をしている難波憲吾さん宅の特産米を分析し、下図のようにグリシンと呼ばれるアミノ酸の一種がコントロール米よりも 1.7 倍豊富であることが分かった。



また、本研究所では継続調査を行うことで、分析米が、環境特 A 米であることも証明した。特 A 米と認められれば販売価格が 2 倍以上となる。福島県の米に高付加価値をつける結果となった。

・機能生性分コエンザイム Q10 の脳へ与える機能の見える化。

本研究の目的は、健康寿命の延伸であることから、先だって脳内のドーパミン類の可視化に着手した。パーキンソン病は脳内ドーパミンが産生されなくなる脳神経疾患である。根治薬はなく、対症療法として L-DOPA というドーパミン前駆体の投与しか現在はない。しかし、この L-DOPA が脳内のどこに輸送され局在するのか未解明のままであった。今回、イメージング研究所は、この L-DOPA の可視化に世界初で成功した（論文投稿中）。

本成果は、JST：A-Step 育成ステージの「健康寿命延伸のための安定同位体トレーサーによる脳内ホルモン可視化技術開発」として採択された（1 億円/2.5 年）。

まとめ

本研究所の初年度としては充実した活動が行えた。来年度は、さらに見える化を推し進め、福島大から世界へ科学の発展に寄与したいと思う。

成果

論文

74. Sakasegawa, Shin-ich, Taira, Shu, Yamamoto, Kei, Sugimori, Daisuke ‘Enzymatic Synthesis of 1-Alkyl-2-hydroxy-sn-glycero-2,3-cyclic-phosphate Using A Novel Lysoplasmalogen-Specific Phospholipase D’ *European Journal of Lipid Science and Technology* (2019)

73. Hase T., Shishido S., Yamamoto S., Yamashita R., Nukima H., Taira S., Toyoda T., Abe K., Hamaguchi T., Ono K., Noguchi-Shinohara M., Yamada M., Shoko Kobayashi ‘Rosmarinic acid suppresses Alzheimer’s disease development by reducing amyloid β aggregation by increasing monoamine secretion’ **9**, Article number: 8711, *Scientific Reports* (2019)

72 Wang, Siqian, Kitamura, Yuka, Hiraishi, Noriko, Taira, Shu, Tsuge, Akihiko, Kaneko, Tatsuo, Kaneko, Daisaku ‘Preparation of mussel-inspired biopolyester adhesive and comparative study of effects of meta- or para-hydroxyphenylpropionic acid segments on their properties’ **165**, 152-162 *Polymer* (2019)

71. R. Wang, T. Yamada, S. Arai, K. Fukuda, H. Taniguchi, A. Tanimoto, A. Nishiyama, S. Takeuchi, K. Yamashita, K. Ohtsubo, J. M., N. Onoda, E. Hirata, S. Taira, and S. Yano ‘Distribution and activity of lenvatinib in brain tumor models of human anaplastic thyroid cancer cells in severe combined immune deficient mice’ *Molecular*

Cancer Therapeutics

18 (5) 947-956; (2019)

依頼原稿

見えないものを見る科学～農学分野への応用

～ 平修 「農業と科学」

他、5 編

新聞記事

福島民報 10 件

福島民友 7 件

農業新聞 1 件